

第38回くるめの考古資料展

江戸時代のくるめ

出土品から見える久留米藩のくらし



会期 平成25年10月8日(火)～11月10日(日)

10:00～18:00

会場 くるめりあ六ツ門5階

六ツ門図書館展示コーナー (入場無料)

●休館日：月曜日、第4木曜日 (月曜日が祝日の場合は開館)

キラリ*久留米
輝く、人*まち。

天保年間(1830～1844)久留米城下図

ごあいさつ

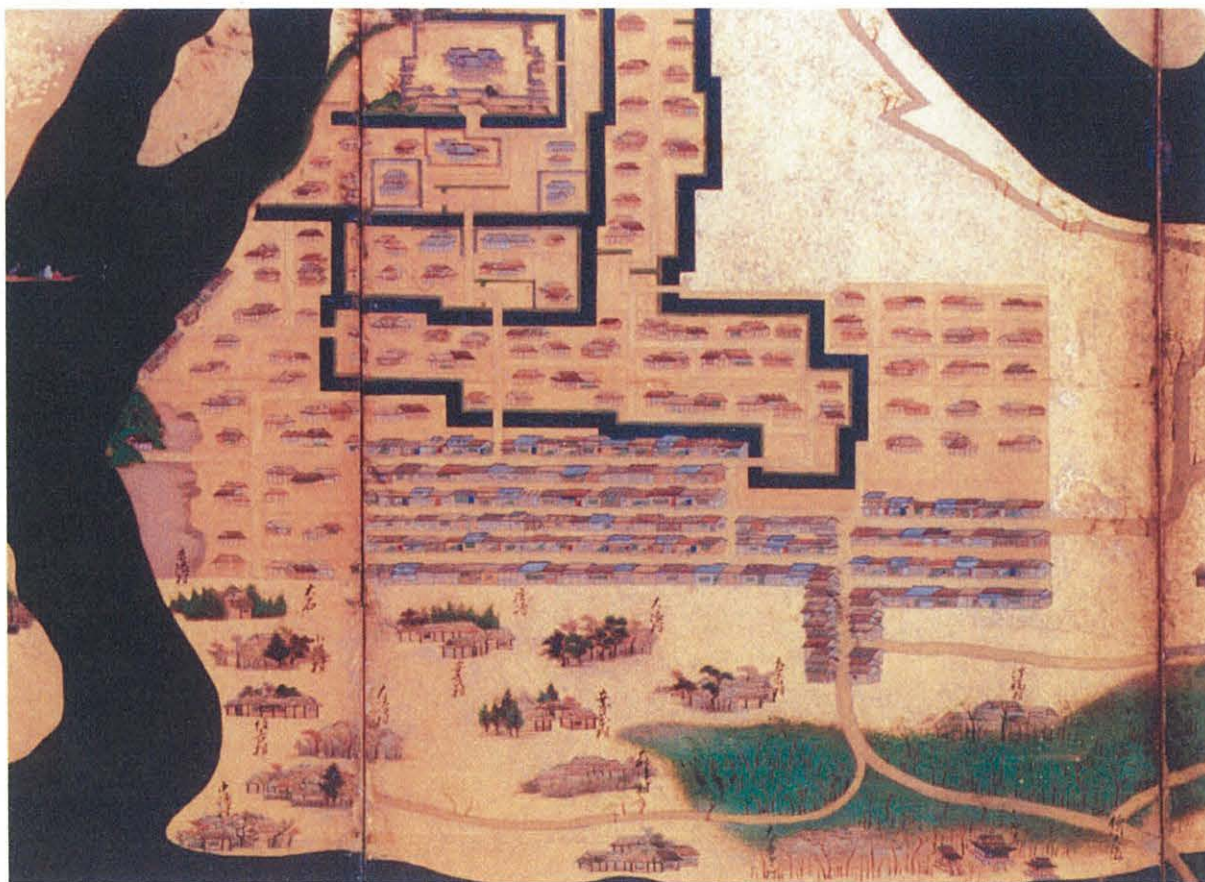
久留米市では「文化の日」をはさんで設けられている、「文化財保護強調週間」(11月1日～7日)に「くるめの考古資料展」を開催し、市民の皆様にも久留米の遺跡や歴史を紹介しています。38回目を迎える本年度は「江戸時代のくるめ」をテーマにした展示を行います。また、今回は、例年開催会場としていました、埋蔵文化財センターから、六ツ門図書館展示コーナーに会場を移して開催いたします。

この展示を通して、久留米の歴史について考えていただく機会になれば幸いです。

末文になりましたが、展示会を開催するにあたりご協力いただきました多くの関係機関、関係者の皆様に深く感謝の意を表します。

平成 25 年 10 月 8 日

久留米市長 榎原 利則



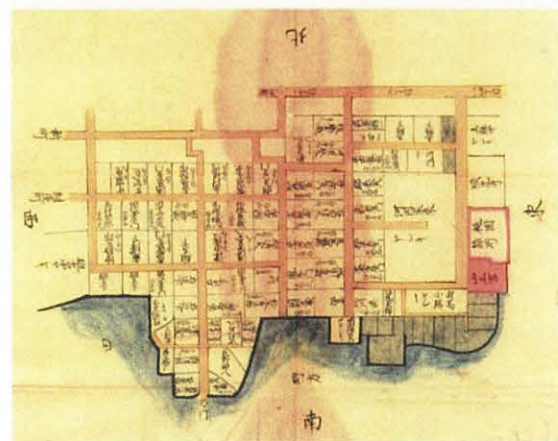
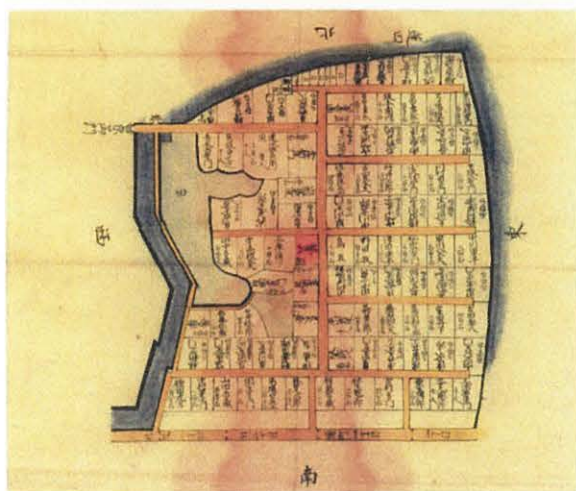
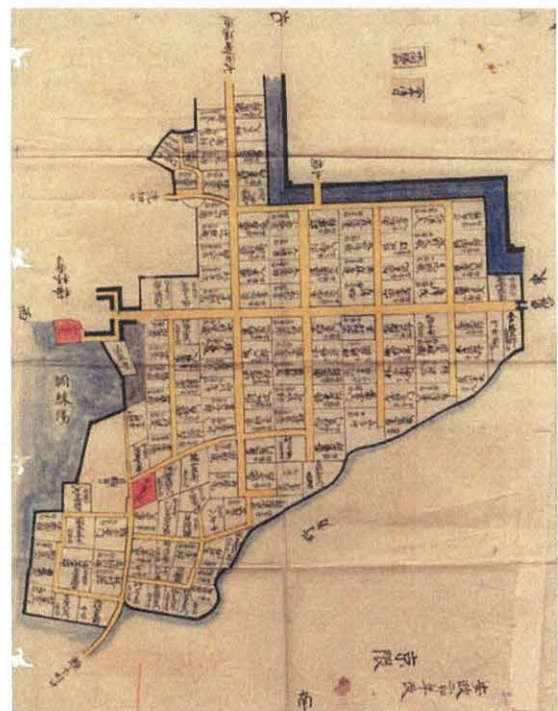
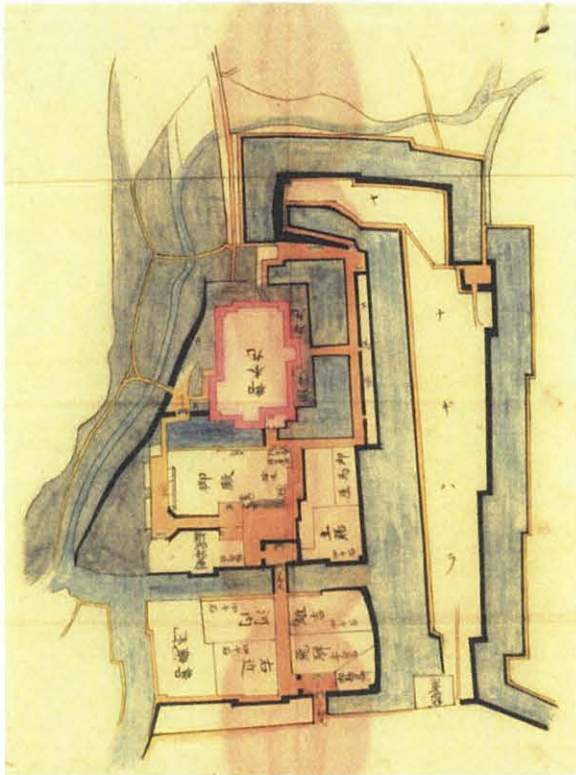
久留米藩領図屏風（一部抜粋）17世紀末頃

く る め は ん り ゚ ょ う げ い ょ う び ゚
久留米藩領図屏風、絵図について

久留米藩領図屏風は、藩主有馬家に伝来したもので、名前のとおり城下町から農村部まで久留米藩の領内を描いた屏風です。その内容から、江戸時代前期に制作された国絵図をもとにしたと考えられています。特に、城下町を描いた部分には、侍屋敷や町屋の建物の様子が描かれ、貴重な絵画資料となっています。

城下町の絵図は、延宝8年(1680)と天保年間(1830~1844)に作成された絵図が知られています。享保11年(1726)の大火灾後に城下町が改変され、さらに広がっている様子がわかります。

そのほか、幕末から明治初めに作られた切絵図もあり、外郭、櫛原、京隈、庄島など侍屋敷の地区ごとに住人の名前が記されています。



安政二年図(1855)

(左上) 城内図

(右上) 京隈

(左下) 櫛原

(右下) 十間屋敷

高級品の流通

陶磁器は近くに肥前(今の佐賀県・長崎県)という一大生産地があるため、有田焼などは早くから多量に流通していました。

その中には、本来輸出用に作られた荒磯文碗あらいそもんや柿右衛門様式の色絵人形、オランダ東インド会社のマークが描かれた皿などがあり、榎原侍屋敷えのくわらでは蕪を描いた鍋島焼なべしまやきも出土しています。

17世紀の中頃に京都の陶工野々村仁清ののむらにんせいや尾形乾山おがたけんざんの作品が人気を呼んで京都の焼物

が流行すると、京都風の碗、皿をまねた作品が肥前でも多く生産されました。また、調味料となる焼塩は現在の大阪府にある堺湊さかいみなとのものが最高級品とされ、その名が刻印され素焼きの壺に入れた焼塩が全国に流通していました。

江戸時代も終わりにになると、イギリスやオランダで作られ、外国の風景などが印刷された西洋陶器の皿や鉢、清時代の中国で作られた磁器が輸入され、異国趣味がある人々に珍重されました。



中国製の磁器 西洋風人物のレリーフが装飾されています。西洋陶器のようにも見える珍品です。



中国景德鎮窯のお皿 大変薄い作りで、高級感が滲み出ています。



鍋島焼皿 鍋島焼は鍋島藩窯の高品質の焼物です。将軍家への献上、公家・大名の贈答品など特別誂あつらえの磁器として珍重されました。



西洋陶器 イギリスのアダムズサンス製の皿です。中央に庭園の風景がプリントされています。

食の器

豊臣秀吉の朝鮮出兵後、朝鮮半島から連れてこられた陶工が陶器を焼き始めます。また有田で磁器用の石が発見されると国内で磁器の生産が始まり、中国や朝鮮半島などから輸入されていた陶磁器に代わり国産品が普及していきました。

久留米の城下町を発掘すると、碗、皿、鉢、猪口、段重、紅皿、徳利、急須、瓶、土鍋、すり鉢、焔炉、壺、甕などの陶磁器がたくさん出土しています。当時の生活や流行の変化に応じて、たくさんの種類の製品が使われて



茶碗 発掘調査では多くの食器が出土します。器の文様や形から、当時の流行などを知ることができます。

いたことがわかります。

陶磁器の他には、漆器の椀や膳、箸などの木製品などもあります。

出土品の中で食材であることがわかるものは、アサリ、シジミ、サザエ、アカニシなど貝類が多いのですが、スッポン、イルカなどもあります。

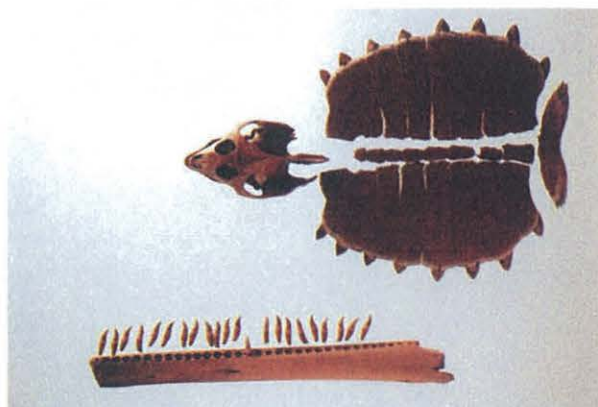
文献によると、幕末は煮売屋（惣菜屋）やウナギ料理屋ができて便利になり、おこしや落雁などを売る菓子店が増えたこともわかります。



貧乏徳利 屋号（店名）や地名が書かれています。酒や調味料等を入れて繰り返し使える、大変エコな商品です。



漆器 日用雑器として使われる他、ハレの日の器として使い分けていました。



スッポンの骨（上）とイルカの骨（下） 食べ物の残りかすなどは、当時何が食べられていたかを知る貴重な資料です。

久留米の焼物

久留米藩では、第6代藩主・則維のりみさの命を受け、朝妻焼あさづまやきの窯が開かれました。職人は肥前の有田や伊万里から招き、石は天草から運びました。底に「朝」の字を記した茶碗や皿などの日用品が主な製品です。

藩の収入源として期待されましたが、思うような収益にはならず、わずか十数年で窯を閉じてしまいました。

このほか、江戸時代の終わりには、柳原焼やなぎはらやきや東野亭焼とうやていやきなどの焼物も生まれました。柳原焼は第9代藩主・頼徳よりのりが久留米城内の柳原園で焼いた御庭焼きでした。東野亭焼は11代藩主・頼咸よりしげの時代に赤坂焼（筑後市）の職人に製作させ、殖産興業を目指しましたが長くは続きませんでした。



朝妻焼の器 朝妻焼は正徳4年（1714）から十数年間だけ操業しました。



朝妻焼の鳥の水飲み 江戸時代の中頃から鳥を飼うことが流行していました。



東野亭焼の土瓶 亀形のツمامミも特徴のひとつです。

遊 び

遊びの文化は子供の文化でもあります。子供の遊べる期間は現代とは比べものにならないくらい短い期間で、一般的に十歳前後で終わるといわれています。多くの子供たちは、十歳を過ぎる頃には、農作業、丁稚奉公、家事手伝いなど様々な仕事に就いていました。

遊びの中には、独楽や凧、羽子板、姉様人形遊びや、ままごと遊びなどが行われていたことが出土品からわかります。

また、発掘調査では、土人形などが多く見つかることがあります。これは、旅先から子供たちにと大人が買って来たものが多く、動物などの人形には色々な意味があり、子供の成長や健康を祈る親の願いが伺えます。

この他、富裕層の人は、茶の湯や香道などの趣味に興じる人がでできます。大人の遊びは武家や商人の嗜みとして盛んだったようです。



木製の遊び道具 女の子は羽根突きや人形遊び、男の子は独楽回しなどで遊んでいたことがわかります。右下の模造刀には「正宗」の銘があり、面白い資料です。



人形各種 人物や動物の土人形や色絵人形など、多種多様なものが出土します。



お茶道具 煎茶の器の出土も多く、お茶に興じる当時の様子が伺えます。

装いと小物

当時の人々がどんな姿をしていたのかは残された浮世絵などの資料や発掘調査の出土品から知ることができます。当時の人々は粋でお洒落な姿をしていることから、当時の美意識が垣間見えます。

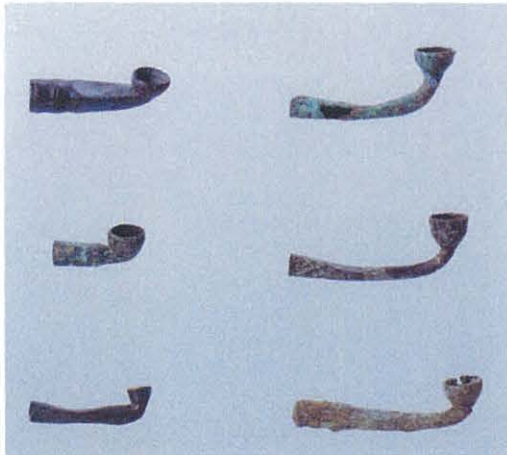
履物のうち、遺物として出土するもの多くは下駄類です。下駄は木製の台部に鼻緒を装着した履物の総称で、お洒落というよりは生活必需品といった位置づけとなるもので

す。江戸時代になると、住宅に畳を敷くことが一般的となり、畳が汚れるのを避けるために下駄を履く機会が増えたといわれています。

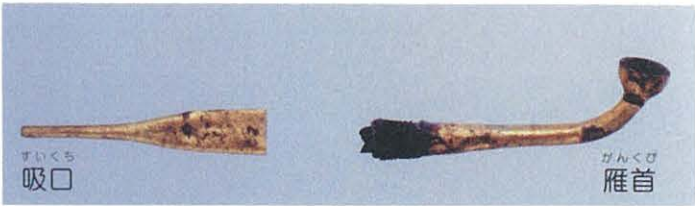
また、度々禁令がでるほど流行していたタバコ。粋に煙管をふかす姿は誰にでもできるお洒落として、盛んだったようです。また、おしゃれ上級者になると、根付の細工に凝る者もでていたようです。



出土した下駄 れんば 連歯下駄や さしば 差歯下駄があります。差歯下駄は歯を付け替えることで長く使用できました。



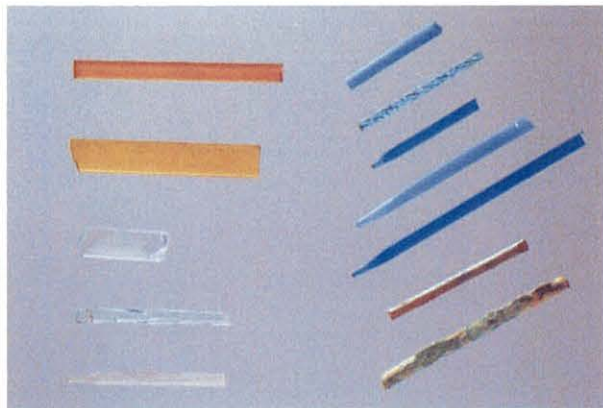
煙管（雁首） 度重なる禁止令が出されるほど、嗜好品として流行しました。



煙草入れ 携常用の入れ物です。筒状のものに煙管を、布状のものに刻み煙草を入れて持ち歩きました。

女性のおしゃれも欠かせないポイントのひとつです。

髪を飾る道具に、櫛・笄・簪があります。櫛は初め、髪を梳き、髪形を整えるのが主な役割でしたが、後には髪飾りとしての役目が強くなり、装飾性の高いものが作られるようになりました。ちなみに、笄は髷部分に差した髪飾り、簪は髪飾りです。また、女性の髪を結うためには、十種類以上の櫛が必要だったそうです。



べっ甲製の笄（左上）とガラス製の笄 笄はもともと髪を掻き整える道具でした。

化粧道具には、紅血・白粉入れなどがあります。江戸時代の化粧は3色が中心です。白は白粉、赤は紅、黒はお歯黒。中でも、紅は高価な代物だったようです。お歯黒は、基本的には既婚女性の象徴です。眉ずみは、主に未婚女性の象徴でした。白粉の白は、「白は七難隠す」といわれていました。原材料は鉛白粉で、体に良いものではありませんでしたが、美への追求のためには、我慢もいとわなかったのでしょうか。



銅製の簪 頭部に耳かきが付き、髪に差す部分が二股になっているのが、特徴の一つです。



紅血と油壺 高価な紅は器に塗って売られていました。紅の原料は紅花の花弁を練り固めて、抽出したものです。唇のほか、目や頬の化粧にも使われていました。

お金の話

江戸時代には、金貨、銀貨、銅貨の3種類の通貨がありました。

このうち、金貨は主に江戸を中心に東日本で使われ、大坂を中心とした西日本では銀貨が主に使われていました。銅貨は1枚一文とされた寛永通宝が全国で流通していました。

そのため、全国での商取引などでは金貨・銀貨・銅貨などをその時の相場に応じて換算する必要があり、非常に不便でした。

また、藩の財政が苦しくなった天和元年(1681)以降、主に藩内のみ通用す

るお札「藩札」が度々発行されています。

市内の遺跡からは、二朱金(8枚で一両の価値)、豆板銀も出土していますが、最も多いのはやはり寛永通宝で、そのほかには明時代の中国銭である洪武通宝、宝永5年(1708)のみ造られて1枚で寛永通宝4枚分の価値があるとされた寶永通宝、天保6年(1835)に初めて造られて寛永通宝100枚分の価値とされた天保通宝などが出土しています。



二朱金



藩札 諸藩が発行した藩内で流通するお金です。厚手の和紙に、木版で印刷されていました。



寛永通宝 発掘調査で出土する銭の大半は寛永通宝です。

久留米城下町関係年表

西暦	年号	主なできごと
1587	天正 15	豊臣秀吉が九州平定。小早川秀包が久留米城主に封ぜられる。
1600	慶長 5	田中吉政が筑後国主になる。久留米城を改修し、次男則政を城主とする。この頃城下町が整備されたといわれている。
1621	元和 7	有馬豊氏が久留米に入封する。本格的な久留米城の大改造、城下町の整備がはじまる。
1622	8	新町（中町）、長町（通町）四丁目までができる。
1631	寛永 8	黒田・加藤両家の協力を得て、久留米城の堀が完成。
1632	9	経隈（後に京隈）村に土屋敷ができる。
1641	18	京隈・櫛原土屋敷の建設がすすむ。
1644	正保 元	本丸を改築。
1696	元禄 9	城下町大火（白石火事）。城下町の大半が焼失する。
1714	正徳 4	朝妻焼はじまる。
1812	文化 9	伊能忠敬、九州測量。久留米に入る。
1813	10	田中久重、井上伝のために絵絣製作法を考案する。
1819	文政 2	田中久重、五穀神社祭礼で初めてカラクリ興行を行う。
1837	天保 8	この頃、坂本元蔵が久留米ツツジの品種改良に取り組む。 (天保年間 1830～1844)
1844	弘化 元	水戸学（天保学）派が形成される。
1852	嘉永 5	嘉永の大獄。 田中久重佐賀藩精練方に召抱えられる。
1864	元治 元	蒸気船雄飛丸購入。 田中久重、久留米藩に召抱えられる。 絣を国産品に指定。藩の保護、生産の奨励を受ける。
1867	慶応 3	久留米藩最大の蒸気船千歳丸購入。
1868	慶応 4	藩主、幕府復興への協力を表明。
1871	明治 4	久留米藩難事件。廃藩置県。
1872	5	久留米城の解体始まる。 御殿・家老屋敷・大手門はじめ諸門が解体され、跡地は払い下げられる。
1874	7	久留米城廃城。
1875	8	久留米城の土居を壊し、堀の大部分が埋め立てられる。

第38回くるめの考古資料展

江戸時代のくるめ

出土品から見える久留米藩の暮らし

編集 久留米市市民文化部文化財保護課
〒830-8520 久留米市城南町15番地3

電話 0942-30-9225

印刷 香和印刷株式会社

